聖書を読む会の始まり

聖書を読む会　主事　高橋陽子

改めて顧みますと、聖書を読む会は40年の歳月を歩んでおりました。　「さあ始めよう」と言って始めたのではなく、気がついたら「歩き始めていた」というのが、聖書を読む会の始まりということになります。

1970 年にキリスト者学生会（KGK）は学内活動のために、「マルコ」と「旧約聖書の聖徒たち」の帰納法による聖研用手引を印刷しました。これらは小グループでのディスカッション方式による聖研手引として、学内での活動に有益に用いられていきました。

聖研グループでの学び合いが続いていくと、必然的に次の手引が求められるようになりました。そこで、Neighborhood Bible Studies（NBS）発行の手引の邦訳出版が計画されました。ところが当時KGKでは「書物の出版を控える」ということでしたので、先の二書以外の出版はできませんでした。

学生たちの真摯な求めとその必要を見せられて、だれかが、どこかが、手引を出版しなければと、切実に願う者たちの祈りに、神は応えて下さり、思いもかけない道が開かれていきました。そのころ日本での文書活動に重荷をもたれたケン・テーラー師が、先の二書の翻訳・編集に従事した私たちに、手引の出版費として 9000 ドルを贈って下さったのです。当時、これは10種類ほどの手引の出版費に相当する金額でした。

私たちは早速この献金をCLCに提供して、手引の発行所となることを依頼しました。CLCはこの申し出を快く引き受けて下さり、「マルコ」「使徒の働き」「聖書を読む会の始め方」が出版されることになりました。

一方、協力主事としてKGKの働きに参与していたＬ．フライシュマン、Ｖ．ボーエン両宣教師も、これらの手引や「基礎の学び」を用いて、近隣の方々とグループ聖研を始めていました。最初は三人の方々との学び合いでしたが、五人となり、十人となり、いつかグループも三つ、四つと増えていきました。

手引が書店に並ぶようになると、学生たちばかりでなく、一般の方々にも利用されることになり、やがて北海道から沖縄までの多くの地域で、聖書を学び合う小グループが始まるようになりました。それにつれて私たちは聖研グループの始め方や学び合いの進め方などについての問い合わせや、説明会やセミナーに出向く要請を受けるようにもなりました。

このころから、この働きは「聖書を読む会」（SYK）と呼ばれるようになりました。さらに十数名の姉妹方と、相談会と名づけて、働きのために、祈り、考え合う日を設けることにもなりました。このことは聖書を読む会にとって、画期的な前進でありました。

そこで相談会は手引の出版に関して、CLCを離れて、「聖書を読む会」での発行を決断しました。今日に至るまでに一時聖書同盟に協力していただいたこともありましたが、当会独自で手引を発行してきました。

1980年にKGKでの働きを退いた二人の宣教師のために、私たちは受け入れ側スポンサーとして、任意団体「聖書を読む会」を組織いたしました。同時に信仰基準と規定を定め、本紙４，５頁の間に記してある「目的及び事業」を成文化しました。

設立当初の理事は十人でした。それから30年、その内の四宣教師は帰米し、四姉妹は召天し、一人は牧会者の妻となって牧会に専念するようになりましたが、神はご自身の始めた「わざ」を、新しく人を起こして継続しておられます。聖書を読む会はまさに神ご自身の働きであることを痛感させられております。

聖書を読む会の願いは、手引を用いて聖書を読み進むお一人びとりが、聖書の読み方を会得し、聖書に聞き、みことばに生きるキリスト者と、成長されることなのです。